

2021年度 入学試験 国語 問題冊子

早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

注意事項

1. 問題は、本冊子の p. 1～p. 26 となります。
2. 解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
3. 「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
4. 監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
6. 解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
7. 「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
8. 問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。

※ 解答上の注意

文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさと・濃く）記しなさい。
字画（漢字を構成する点や線）が認められない場合には、不正解または減点の対象になります。

受験番号							氏名

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いろいろな人と知識について話をし、「知識^{注1} || 事実」の (注1) エピステモロジーを聞いた時に私が思い浮かべてしまうのは、
(注2) ドネルケバブである。ドネルケバブは肉片を a シュウ成してつくる巨大な竹輪のようなもので、トルコの伝統的な料理だ。

知識はきれいに切り取ることができる断片である「客観的事実」として存在し、その断片を人から教えてもらう。「知識 || 事実」のエピステモロジーでの知識モデルは、「客観的な事実」である知識片をぺたぺた表面に貼り付けていって、ひたすら大きくしていくイメージを b カン起させる。そこで私はこれを 1 「知識ドネルケバブ・モデル」と呼んでいる。「知識 || 事実」のエピステモロジー、それを根とする知識習得についての「ドネルケバブ・モデル」(ぺたぺた貼り付けモデル)がなぜ「生きた知識」に結びつかないのかを、これから述べていこう。

2 母語は、様々な知識の中でも「使うための知識」、つまり「生きた知識」の代表である。言語を使えるようになるために、子どもは何をどのように学んでいるのかをここであらためて振り返りたい。

そもそも言語は、断片的な知識をぺたぺた貼り付けていき、ボディをどんどん大きくしていけば使えるようになるわけではない。音韻の規則、文法、分厚い辞書にリストしてある単語の意味をすべて「暗記」しても使えるようにはならない。子どもはぺたぺた知識を貼り付けて母語を使えるようになっていくわけではないのだ。

言語はあまたの要素が互いに意味をもって関係づけられてつくられたシステムである。語彙の学習を例に挙げれば、単語を覚えるということは、ドネルケバブの肉片を貼り付けるように、それまでの時点で作られている語彙にさらに新しい単語を加えていくことではないのだ。新しい単語を語彙に入れるために、子どもはその単語の意味を自分で考える。そのときには、すでに知っている単語との関係を考え、語彙のシステムの中の新しい単語の収まる場所を考える。新しい単語が語彙に入れたら、その単語と関係する単語の意味も変わりうるし、語彙のシステム自体も変動する。

これは言語に限らず、どのような分野の知識にも言えることである。最も役に立つ「生きた知識」とは、知識の断片的な要素がぺたぺた塗り重ねられて膨張していくものではない。常にダイナミックに変動していくシステムなのである。このシステムは、要素が加わることによって絶え間なく、^cアみ直され、変化していく「生き物」のような存在なのだ。

では逆に、断片をぺたぺた貼りつけるだけの知識とはどのようなものだろうか？ このモデルに近いのは、使うことができない外国語の知識だろう。私自身、中学や高校のときにはテストのために英単語の意味を日本語に置き換えて一生懸命覚えたものだ。例えば、「break ≡ 壊す」「deep ≡ 深い」「hard ≡ 固い」のような具合に。しかし、このように覚えた対応する訳語は「意味」と言えないものだったし、この知識で英語の文章をつくることはできなかった。「break」という単語が実際にどのように使われる単語なのかを知らなければ、単に「break ≡ 壊す」とだけ覚えても文はつくれない。「break」と「壊す」とでは、動作の対^dシヨウになる名詞（モノ）が違う。つまり、意味が同じではないのだ。

ほんとうに「break」の意味を理解するためには、「break」と意味が似た別の動詞（「rip」「tear」「smash」「crash」「bend」など）と「break」の意味がどのように違うのかも知らなければならぬ。ところが、「外国語の単語 ≡ 日本語の単語」というドネルケバブ・モデルをもっている学習者は、「break ≡ 壊す」と覚えるだけで安心してしまふ。「break」という単語が文脈によって意味が変わっても注意を向けないし、関連語との関係を考えることもしない。結局、「break」の意味はずっと「壊す」のまま、^e「rip」「tear」「smash」「bend」などとの関連付けもされないまま、単に「壊す」という訳でラベル付けされただけの英単語として放置される。そして、³ 本来はことばの「意味」とはいえない、日本語に置き換えられただけの英単語がぺたぺた「英単語ドネルケバブ」に新たに貼り付けられていく。そのポリウムはどんどん大きくなっていくが、結局、英語は使えないままなのだ。

子どもは音韻の規則、文法の規則、単語の意味など、言語という大きなシステムを構成する要素をほとんどすべて自分で見つける。言い換えれば、子どもはドネルケバブの肉片のようにすでに切り取られた知識片を「はい」と渡されて、それを暗記しているのではない。切り分けられていない知識の塊をどのように切り出していくかを自分で見つけなければならない。言語

を使うために子どもは「外にある知識を教えてもらう」のではなく「自分で探す」。要素を見つけながら、要素どうしを関連づけ、システム自体も発見していく。自分で見つけるから、すぐに使うことができるのである。

例えば、乳児は自分の母語の単語の音の最小単位となる音素を発見する。しかし、日本語を母語とする赤ちゃんは英語を母語とする赤ちゃんでは、発見する音素が違う。音素というのは、「客観的に存在する音」ではなく、「発見され、解釈される音のカテゴリー」なのである。英語ネイティブ話者が発音した「[ræc]」と「[læc]」は一歳以上の英語母語の赤ちゃんには「違う音を要素にもつ違う音の単語」として聴こえるし、日本語の環境で育つ赤ちゃんには「同じ音の要素をもつ同じ音の単語」として聴こえるのだ。⁴ これはとりもなおさず知識は「客観的な事実」ではないことを意味する。

これは音素のことに限らない。人生の経験そのものが見ているものを変える場合もある。^(注3) 下側の絵を見てほしい。何の絵に見えるだろうか？ 「抱き合う男女」の絵だと思わずだ。しかし、子どもがこの絵を見たら何の絵だと思うだろう？ そう考えてもう一度絵を見直してほしい。何が見えてくるだろうか。そう、答えは「イルカ」である。

つまり、何がいるか、何を視るべきかを前もって知っているのと知らないのでは、同じビジュアルイメージを視ても、見えるものは異なるのである。鶏のヒナのおしりを見ても、普通の人には雌雄の区別はつかない。しかし、訓練を積んだ熟練者は一瞬で見分けることができる。初心者が電子顕微鏡を通してスライスを観察しても、特定の細胞組織を識別できない。熟達するにつれ、容易に識別できるようになる。最初は細胞分裂に気づくことができなかつた顕微鏡使用者が、いったん何を探せばよいのか気づかされると、難なく観察できるようになる。

要するに、世界は客観的に存在しても、それを視る私たちは、X。聴くこと、視ることは、私たちがもつとも多くの情報を得る経路である。聴いて記憶に取り込まれた情報が、「解釈されたもの」であるとしたら、それを基 ^e パンに習得される知識もまた「客観的な事実」ではありえないのだ。

「生きた知識」は目の前の問題を解決するのに使うことができるだけではない。⁵ 新たな知識を創造するために使うことができる。新たな知識はゼロからは生まれえない。すでに知っている知識を様々な組み合わせることで生まれる。創造力の源泉

は持っている知識を使って想像することである。熟達者の向上の源泉も想像力だ。熟達者は、いまはできなくても、自分が目指そうとするパフォーマンス、あるいは自分が得たいと思っている知識の姿を想像することができる。人は、想像力といま持っている知識とを組み合わせることによって、無限に新しい知識をつくっていくことができる。それに対して、ドネルケバブの肉片をぺたぺた貼り付けるように覚えただけの知識は、使うことができない。使えないから、他の知識と組み合わせられて新しい知識を生むこともないのである。

(今井むつみ『学びとは何か』による)

(注) 1 エピステモロジー——知識についての認識のこと。

2 ドネルケバブ——下味を付けた肉を大まかにスライスして積み重ね、垂直の串に刺し、あぶり焼きにしてから外側の焼き上がった層をナイフで薄くそぎ落とした肉料理。

3 下側の絵——出典の当該部分には瓶に描かれた「だまし絵」が挿入されている。

問一 波線部 a 「シュウ(成)」・ b 「カン(起)」・ c 「ア(み)」・ d 「(対)ショウ」・ e 「(基)バン」について、同じ漢字を用いるものとして最も適当なものを、次の各群の A ～ E の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a シュウ(成)

- ア 事態を速やかにシュウ拾する。
- イ 京都にシュウ学旅行に行く。
- ウ 卒業文シュウを作る。
- エ 潔く引退し有シュウの美を飾る。
- オ 首相がシュウ議院を解散する。

b カン(起)

- ア 新入部員をカン誘する。
- イ 古い部品を交カンする。
- ウ 勉強の一カンとして古老から話を聞く。
- エ 武力を背景にして他国にカン渉する。
- オ 国会で証人カン問を行う。

c ア(み)

- ア フリーソフトで動画をヘン集する。
- イ 最新のボウ績工場で働く。
- ウ 犯人が警察の捜査モウにかかる。
- エ 事の経イを説明する。
- オ 間もなくケツ果が発表される。

d

(対) ショウ



ア 日本語には多数の人シヨウ代名詞がある。

イ 鳩は平和のシヨウ徴だ。

ウ 映画鑑シヨウも彼の趣味の一つらしい。

エ LEDシヨウ明よりもランプの方が風情がある。

オ 腰を落としてシヨウ撃に備える。

e

(基) バン



ア 高等裁バン所に控訴する。

イ 今バンバンの食事代にも事欠く。

ウ 店の看バンバンをリニユアルする。

エ 折り畳み式の将棋バンバンを使う。

オ 今週は教室の掃除当バンバンだ。

問二 傍線部1 「『知識ドネルケバブ・モデル』」とあるが、ここで言う「知識」とは、どのようなものか。その説明として**適当でないもの**を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 客観的事実として存在するがゆえに、学習者による解釈の違いがほとんど生じないもの。
- イ 学習者とは独立して存在しており、累積するにしたがって量的に大きくなっていくもの。
- ウ 一つの要素が加わることで、既存の構成要素や要素間の関係に変化をもたらし得るもの。
- エ 誰にとっても同じものとして存在しているがゆえに、人から人へ正確に伝達できるもの。
- オ 客観的事実である断片の集合として構成され、量的変化が質的变化に結びつかないもの。

問三 傍線部2 「母語は、様々な知識の中でも『使うための知識』、つまり『生きた知識』の代表である」とあるが、ここで言う「母語」とは、どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 学ぶ主体によって独自に解釈された要素が加わることで全体も再構成されていくもの。
- イ 新たな要素を自ら取り込み、絶え間なく数を増やしていく生き物のようなもの。
- ウ 学習者がより客観性の高い情報によって更新しながら最終的な完成を目指していくもの。
- エ 多くの要素が互いに意味をもって結び付き、普遍的システムとして構成されていくもの。
- オ 単語などの新たな要素が既に存在する語彙のシステムに機械的に累積していくもの。

問四 傍線部3「本来はことばの『意味』とはいえない、日本語に置き換えられただけの英単語」とあるが、なぜ「本来はこ

とばの『意味』とはいえない」のか。その説明として**適当でないもの**を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本来の「ことばの『意味』」とは、その言語システムの中で、その言葉と関連する他の言葉との違いによって規定されるものだから。

イ 本来の「ことばの『意味』」とは、言語システム内の他の言葉との関係性で暫定的さんていに成立しているだけで、新たな言葉が加われば変化する可能性のあるものだから。

ウ 本来の「ことばの『意味』」とは、その言葉の言語システムの中ですら文脈に応じて変化するものであり、まして異なる言語システム内の言葉と対応するはずがないものだから。

エ 本来の「ことばの『意味』」とは、外部から与えられるものではなく、他の言葉との関係も含めて発見され、解釈されるものだから。

オ 本来の「ことばの『意味』」とは、講義形式の学習によってではなく、実生活で用いることによって身に付くものだから。

問七 傍線部 5 「新たな知識」とあるが、これはどのようなことによつて生まれるのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 既存のシステム内の要素間の結び付きを円滑にして新たな結び付きの生成を促すこと。
- イ 先入観や偏見のもとになる既存の知識システムを一旦解体して初期状態に戻すこと。
- ウ 自らの理想のもとに、既存のシステム内の要素同士を新しい形で結び付けること。
- エ 自ら探し出した知識と外から与えられた客観的な知識とを有機的に結合すること。
- オ 天才的なひらめきでまったく存在しない要素間の結び付きを創り出すこと。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

■ I 毎年、師走も半ばを過ぎたところから、おむら婆さんは、なにかにつけて嫁の顔色を窺うかがわないではいられなくなる。

今年もまた、いつもの年の暮れと同様、^a だしぬけに猫撫で声であることをいい出すつもりではないのかしらん、と気が気ではないからだ。

あのこと、とは、^b 体よくいえば一種の里帰りの勧めである。

「おかあさん、今度の年末年始はどうなさる？ やっぱり¹ 村の御実家へ帰られて何泊かしてきなすつたら？ うちなんか、子供たちがますます当世風になって正月情緒も年々薄れる一方ですけど、あちらは相変わらずお身内が大勢集まってお賑やかなんでしょう？ うちで味気ない思いをなさるよりは、みなさんとのんびりお正月気分を味わってらっしゃいませな、おかあさん……。」

嫁がそんなことをいい出すときには、いつだって、とつくに婆さんのよそゆきの支度は勿論、実家へ持参する手土産のたぐいまで、用意がすっかり整っている。婆さんは否も応もない。

もともと仮病まで使って嫁に抗あうほどの臍曲へそがりではないつもりだし、正月ぐらいは親子水入らずでという嫁の気持もわからぬではないから、このような勧めも年寄りへの思い遣りというものだろうと考えることにして、大晦日の朝、休暇に入つて軀からだを持て余している大学生の孫の車におとなしく乗り込み、市から凍てついた道を小一時間ばかり揺られて村の実家へ運ばれるのが年中行事になっているのだが、こんな傍目はために羨まれる里帰りも、近頃、当人にとってはなかなか楽なものではなくなっている。

実家は、昔は村の^(注1) 肝煎きもいりをしたこともある旧家で、いまでも指折りの裕福な農家だが、父親を継いだ長兄はすでに他界して、いまはおむら婆さんには甥おいに当る長兄の倅せがれの代になっている。婆さんは五人きょうだいの末娘だったが、上の娘が齡の順に亡くなって、気がつくとき婆さん一人きりになっていた。だから、たまになにかの用事で実家へ帰ることがあっても、

昔話の相手も見当らなくて、迎えがくるまでぼつんとひとり、念仏を唱えるともなく仏壇の前にしばらく坐り込んでくるだけである。

家のなかがひっそり閑としている普段でもそうなのだから、うっかり盆や正月に帰ったりすると、自分の居場所さえ見つけかねることになる。遠くの都会や他県の町へ働きに出ている幾人もの甥や姪たちが家族連れでぞろぞろ帰ってきて、さしもの広い家も客を欲張りすぎた民宿のような観を呈するからである。

正月には、いったい何家族が集まるのだろう。甥や姪の子供たちのうちには、すでに結婚しているのもいて、毎年どこかの家族に新しい子供が増えていく。赤児の泣き声と子供の駄々をこねる声を主にした喧噪が年毎に募るばかりである。

そんな実家の有様を、嫁も薄々知ってはいるのだろうが、それでも毎年、暮近くなると何食わぬ顔で、「あちらでみなさんとのんびりお正月気分を味わっていらっしやいませな、おかあさん。」とくる。いくら嫁の好意だと思いうことにしていても、

2 このときばかりは小憎らしくなるが、おむら婆さんには、いっこうに嫁に抗う気持が起こらない。

もはや望みは自分の年齢だけで、何年か前の誕生日に、ささやかながら古稀のお祝いをして貰ったときは、これでこの年末からは気鬱な里帰りなどしなくても済むだろうと思っただが、あっさり当てが外れてしまった。年の暮れになると、嫁の顔を窺いながら、びくびくするようになったのは、それからである。嫁は虫も殺さぬような顔をしていて、自分がいくつになっても正月には村の実家へ追いつもりでいるらしい。

II おむら婆さんは、すでに七十五歳になっていた。もう歳が歳だし、去年あたりから、孫の運転する四輪駆動とやらのごつい震動が軀の芯に伝えてきて、実家についても自力では車から降りられなくなった。孫に肩を貸して貰って、やっと

(注2) 上り框まで辿りついても、履き物を脱ぐ前に、まず気付けの梅酒をねだることになる。

このところの急な衰えようは我ながらうろたえるほどで、難儀な里帰りなどそろそろ御免蒙りたかった。嫁もまた、孫の報告を聞いて、もう遠出は無理だと判断しているかもしれない。もしも嫁から、当世風の味気ない正月でよろしければ家で一

緒にと誘いがあつたら、^c 鷹揚おうように笑つて、

「んだったら、まんず、すさしぶりで仲間さ入れて貰いあんしょうかなし。」

と、おむら婆さんは答えるつもりでいたのだが——またしても当てが外れてしまった。

孫の車が走り出してから、³ 婆さんはガーゼのハンカチで涙と目脂めやにを一緒に拭いた。どうでも帰れというのなら帰つてやるが、その代わり実家に泊まるのはよそうと思つた。去年までは、夜具からあぶれた連中と炬燵こたつに雑魚寝して正月を迎えたものだが、今年は手土産を置き、仏壇を拝んだら、すぐさま軒下に積んである薪まきざつば雑把ざつぱのなかから杖にする棒切れを見つけて、さつさとひとりで駐在所へ移ろうと思つた。

といつても、別段、村の駐在さんに保護して貰おうというのではない。駐在巡査の岩蔵は、昔よく川で一緒に水浴びをした幼馴染みの一人息子で、今は世話好きな女房と農協に勤める息子夫婦と四人暮らしをしているが、数年前から、おむら婆さんは、実家で年を越したあとこの⁴ 岩蔵一家を訪ねて、一と晩、それこそ手足を伸ばしてのんびり正月の骨休めをさせて貰うならわしなのである。

数年前、岩蔵と再会したときは、雪のない暖かな正月で、元旦の午後、おむら婆さんは所在ないままに実家の背戸から外に出て、穏やかな陽を浴びている村道をすこし歩いてみた。小川のほとりまでくると、向こう岸から自転車を軋きしませながら土橋を渡ってくる男がいて、袂たもとのドロヤナギの木の下に佇たまたずんでいると、自転車の男は前を通り過ぎてから、

「おいたあ、おむら婆っちゃじゃねすか。」

と驚きの声を上げてブレーキの音をあたりに響かせた。

それが駐在巡査の岩蔵で、かつて新婚の息子夫婦を墓参に連れて帰ったころは明るい声が広い稲田によく響く闊達かつたつな青年だったが、いまは目の下に弛たるみが出来て、鼻の下に蓄えたチヨビ髭ひげにも白いものが混じつていた。

その年以来、実家の次には駐在所を訪ねて、岩蔵の母親をはじめ、いまは亡い幼馴染みたちの思い出話にふけて夜更かしをしては、ついでに一泊させて貰うようになった。

今年の正月に訪ねてみると、岩蔵宅では家族が一人増えて四人家族になっていた。前の年の秋口に一人息子が嫁を貰ったのである。嫁は保育園の保母さんだそうで、正月早々の長つ尻な客にも厭な顔一つ見せないばかりか、いまは誰も憶えていないような村の古い童歌をいくつも歌って婆さんを涙ぐませた。

その晩、婆さんは頃合いを見計らって、もう正月気分を十分満喫できたから、これで実家へ帰ることにするといった。岩蔵宅には夜具が四組しかないのを知っていたからだ、そんな婆さんの配慮は忽ち岩蔵の女房に見破られた。

「なに、倅と嫁は一つ布団に寝かせます。若夫婦にはかえってその方がありがたがすべ。なんも遠慮は要りゃんせん。」

岩蔵の女房がせつかくそういつてくれるので、婆さんは、これまでと違って掛布団の襟えりに寝化粧の匂いがうつすら染みついてある夜具に寝かせて貰った。

III 今年の大晦日は、朝から吹雪に見舞われて閉じ込められているせいか、実家の帰省客は例年より人数が一段と多いような気がした。

みちみち考えてきた通り、送ってきた孫を囲炉裏端に待たせておいて、当主に手土産を渡し、仏壇へよそで年を越す身勝手を深く詫わびてから、奥の炬燵で世間話に熱中している甥や姪たちに、今年は駐在所で新年を迎えるつもりだと、おむら婆さんは宣言した。みんなは口を噤つぶんで顔を見合わせた、引き留めるものはいなかった。

婆さんは、板の間の囲炉裏ばたへ戻ってくると、

「また、ちよつくら車さ乗せてけれや。」

と孫にいった。

孫は、薪のいぶりで赤くなつた目をぱちくりさせた。

「もう帰つちやうの？」

「なに、村の駐在所までな。ここが満員だすけ、宿替えせ。」

「駐在所へ宿替えねえ。まさか留置所に寝るつもりじゃないでしょうね、お祖母ちゃん。」

「村の駐在所に留置所なんちよあるもんな。ぐずぐずいわねで、さっさと乗せて走ってけれ。」

「たんまり駄賃を握らされている孫は、仕方なさそうに上り框から婆さんを背負うと、また車の助手席へ押し込むようにして乗せた。」

実家のそばの土橋は避けて、すこし下流の木橋を渡り、そこからだらだら坂を登り詰めたところが駐在所であった。孫は、留置所らしい鉄格子の窓がどこにも見当たらないのを確かめてから、車の向きを変えて窓からいった。

「じゃ、風邪をひかないようにね。今夜は冷えるよ。」

婆さんは、駐在所の赤い軒燈けんとうの下で市へ引き返していく孫に手を振った。

不意に、自分はしくじったのではなからうかという不安に襲われたのは、入口のガラス戸を開けた瞬間であった。奥から、思いがけないものがきこえたのである。婆さんは聞き耳を立てた。やはり赤児の泣き声であった。すると岩蔵に孫が出来たのだ。

やっぱり、しくじった、と婆さんは改めて思った。今夜こそは、おそらく自分が寝かせて貰える夜具はないであろう。まさか、子供の出来た若夫婦を一つ布団へ追いやるわけにはいかないのである。婆さんは、進退きわまつて外を振り返ってみたが、もう孫の車はどこにも見えなかった。

岩蔵の孫は男の子であった。予定日は一月十五日だったのに、一と月も早く飛び出してきてしまったのだという。

「そんならそうと、知らせてくれればよかったに。」

「それが、なにぶん、こっちゃんも動顛どつてんしとりましてなあ。」

「なんも知らんかったんで、いつもみたいに泊めて貰うつもりで来たんだけど……。」

「ああ、泊まっていきなされ。なんも遠慮は要りやんせん。」

岩蔵はそういうと、押入れから青いナイロン製の薄くて細長い布団のようなものを取り出してきた。

「こいつは倅が山登りに使った寝袋でやんすが、薄っぺらなくせに羽毛でも入っているのか、結構暖かいもんでやんす。これに、帯はほどこいて、(注3)長襦袢ながじゆばんで入ってみなされ。」

岩蔵は、納戸に使っているらしい三畳の板の間に座布団を敷き並べ、一枚は二つに折って枕にして、その上に寝袋を横たえてから、

「おらは板戸のむこうに寝ておりやんすからにな、用があるときはいつでも声をかけてください。」
と、入って、出入りの仕方を教えてくれた。

婆さんは、寝袋などに入るのには生まれて初めてだったが、観念して、大晦日の団欒だんらんがおひらきになってから、長襦袢になって入ってみた。胸のチャックを内側から喉のどのところまで引き上げて、じっとしていると、なるほど軀がぼかぼか暖かくなかったけれども、ふところからガーゼのハンカチを出すことはできたが、手が外へ出せないのも、涙と目脂を拭くことはできなかった。5まるで、なにかの蛹さなぎになったみたいだ、と婆さんは思った。それでも、誰に気兼ねもなく身動きできるだけ、実家の炬燵の雑魚寝よりどれほど増しなことか。

おむら婆さんは、安らかな気持ちで目をつむった。それから、除夜の鐘が聞きたくて耳を澄ました。

(三浦哲郎『みちづれ 短編集モザイクI』による)

(注) 1 肝煎り——諸事の世話をする人。村社会の中で中心的存在の人や役目を肝煎りと呼んだ。

2 上り框——建築用語。玄関・土間などから段差のある床の周辺を押える化粧材。

3 長襦袢——和装の際に着用する衣服。着物の下に身に着け、体と着物が直接接触しないようにする。また防寒着として役割も持つ。

問一 波線部 a 「だしぬけに」・ b 「体よく」・ c 「鷹揚に」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群のア～オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a だしぬけに

- ア 唐突に
- イ 早口で
- ウ わざとらしく
- エ 遠慮がちに
- オ 淡々と

b 体よく

- ア 弱みにつけ込んで
- イ やんわりと上品に
- ウ 言葉を尽くして丁寧
- エ 相手の気持ちを考えて
- オ うわべを取り繕って

c 鷹揚に

- ア おおらかに
- イ 努めて冷静に
- ウ 嬉しそうに
- エ 感謝を込めて
- オ 感情を表に出して

問二 傍線部1「村の御実家」とあるが、これは「おむら婆さん」にとってどのような場所になってきているのか。その説明として**適当でないもの**を、次のア～オの中から**二つ選**び、記号で答えなさい。

ア 「おむら婆さん」の父の跡を継いだ長兄も女兄弟もすでに亡くなり、昔話の相手もいないため、精神的安らぎを得にくい場所になってきている。

イ 車の乗り降りすら自力ではできないなど、最近の体力の衰えは自分でも戸惑う程であり、その苦労を思うとどうしても帰りたいとは思えない場所になってきている。

ウ 一年に一度孫や甥たちの顔を見るのはこの上ない喜びであるが、近年はその大きな家も寝るのにも困る程手狭になっており、身体的な安らぎを得にくい場所になってきている。

エ 年々新しい家族が増え大きくなっていく実家の繁栄は晩年の細やかな喜びであるが、当主が「おむら婆さん」の次の世代になって以降、ますます現代風の雰囲気が強まり、落ち着かない場所になってきている。

オ 「おむら婆さん」の甥や姪たちの中には結婚して家族を持つものもあり、その家族も毎年のように増え、騒々しさばかりが募る、憂鬱な場所になってきている。

問四 傍線部3 「婆さんはガーゼのハンカチで涙と目脂を一緒に拭いた」とあるが、これはどのような「涙」か。その説明と

して最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「嫁」に抵抗できない悔しさと、流れゆく時代に取り残されてしまった諦めの「涙」である。

イ 自らの年齢という最後の望みも絶たれた失意と、心無い「嫁」に対する悔しさの「涙」である。

ウ 息子たちの団欒に入れてもらえない寂しさと、車の乗降すらままならない体力の衰えを嘆く「涙」である。

エ 息子たち家族から追ひ払おうとする「嫁」への恐れと、実家にすら居場所を見つけられない情けなさの「涙」である。

オ 耐えられないほど騒がしい若者への腹立たしさと、冷酷非情な「嫁」をもった不遇を嘆く「涙」である。

問五 第Ⅱ 場面の「岩蔵一家」（傍線部4）は、この小説の中でどのような役割を果たしているか。その説明として**適当**でないものを、次のア～オの中から**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア 第Ⅰ 場面における「おむら婆さん」の「嫁」とは対照的に、「おむら婆さん」に心の安らぎを提供する役割を果たしている。

イ 精神的な関係性が喪失している「実家」とは対照的に、「おむら婆さん」との間に一定の関係を創り出す役割を果たしている。

ウ 第Ⅲ 場面における、「赤児」の存在により「おむら婆さん」が居場所を失う危機に瀕するという事件を提供する役割を果たしている。

エ 「実家」への里帰りと共に、「おむら婆さん」が嫁いだ当初から続いている重要な年中行事の一つとしての役割を果たしている。

オ 帰省する孫や甥たちによって年々都会的雰囲気が強まっていく「実家」に代わって、田舎の伝統的正月情緒をもたらす役割を果たしている。

問六 傍線部 5 「まるで、なにかの蛹になったみたいだ」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) ここに見られる修辞技法は何か。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 直喩法 イ 隠喩法 ウ 擬人法 エ 倒置法 オ 感嘆法

(2) この叙述の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 成虫になると大きく形態を変える「蛹」の姿は、「実家」や自家の「嫁」との関係が大きく改善する「おむら婆さん」の明るい未来を暗示している。

イ 暗い殻に閉ざされて身動きができない「蛹」の姿は、「実家」とも自らの嫁とも関係の絶たれた「おむら婆さん」の暗い未来を暗示している。

ウ 殻によって守られつつ自律した生を営む「蛹」の姿は、あたたかな思いやりに包まれた眠りに安らぎを感じる「おむら婆さん」の生の姿を暗示している。

エ 幼虫から成虫への過程の一時期の、ほとんど動かない「蛹」の姿は、これから天国へと飛翔する「おむら婆さん」の安らかな死を暗示している。

オ 外界との接触を完全に断たれた「蛹」の姿は、何ものにも癒やしを求めることのできない「おむら婆さん」の孤独な生き方を暗示している。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、^(注1) 河原院は、融^{とほる}の左大臣の造りて住み給ひける家なり。^(注2) 陸奥^{むちのく}の塩竈^{しほがま}の形を造りて、潮を汲み入れて、池にたたへたりけり。様々にめでたく、¹ をかしき事の限りを造りて住み給ひける。その大臣失せて後は、その子孫にてありける人の、^(注3) 宇多院^{うだのあん}に奉りたりけるなり。然れば宇多院その河原院に住ませ給ひける時に、^(注4) 醍醐^{たいご}の天皇は御子におはしませば、たびたび行幸^{みゆき}ありてめでたかりけり。

さて院の住ませ給ひけるをりに、² 夜半ばかりに、^(注5) 西の対^{たい}の塗籠^{ぬりごめ}を開きて、人のそよめきて参る気色^{けしき}のありければ、院見させ給ひけるに、^(注6) 日の装束^{さうぞく}うるはしくしたる人の、太刀はきて笏^{しやく}取り、かしこまりて^(注7) 二間^{ふたま}ばかりのきて居たりけるを、院、「あれは誰^たぞ」と問はせ給ひければ、「この家の主に候ふ翁なり」と申しければ、「融の大臣か」と問はせ給ひければ、「さに候ふ」と^a 申す。「³ さは何ぞ」と仰せらるれば、「家なれば住み候ふに、かくおはしますがかたじけなく、⁴ 所^{ところ}せく思ひ候ふなり。いかが^b 仕^{つか}るべき」と申せば、「それはいと異様のことなり。我は大臣^{おとど}の子孫の得させたればこそ^c 住^すめ。ものの霊なりといへども、事の理^{ことわり}をも知らず、いかにかくはいふぞ」と、高やかに仰せられければ、霊、かい消つやうに失せにけり。

その時の人々、この事を聞きて、院をぞかたじけなく申しける。「なほ、⁵ ただ人には似させ給はざりけり。この大臣の霊にあひて、かやうに^{ことわり}すくやかに、異人^{ことひと}は答えじかし」とぞいひけるとなん語り伝へたるとや。

(『今昔物語集』による)

〔注〕 1 河原院——京都六条にあつた左大臣源融の屋敷。

2 陸奥の塩竈——現在の宮城県塩竈市。河原院の庭は、仙台湾に面したこの地の景色を模して造られていたとされる。

3 宇多院——宇多上皇。河原院を手に入れたときは既に帝位を退いていた。

4 醍醐の天皇——醍醐天皇。宇多院の息子。

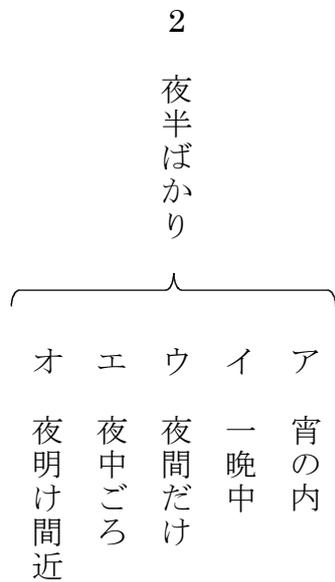
5 西の対の塗籠——貴族の邸宅である寝殿造の西側にある建物の部屋。

6 日の装束——公家男子の正装。

7 二間——「間」は柱と柱の間の距離の単位。従って二間は柱が三本立ち並んでいる長さ。

問一 二重傍線部「かやうに」を現代仮名遣いに書き改めなさい。

問二 傍線部1「をかしき事」・2「夜半ばかり」の現代語訳として最も適当なものを、次の各群のアイオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



問三 波線部 a 「申す」・ b 「仕るべき」・ c 「住め」の動作主の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| ア | a | 源融の霊 | b | 宇多院 | c | 源融の霊 |
| イ | a | 源融の霊 | b | 源融の霊 | c | 宇多院 |
| ウ | a | 源融の霊 | b | 宇多院 | c | 宇多院 |
| エ | a | 宇多院 | b | 宇多院 | c | 源融の霊 |
| オ | a | 宇多院 | b | 源融の霊 | c | 宇多院 |

問四 傍線部 3 「さは何ぞ」とは「それはどうしてだ」という意味であるが、その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 宇多院に河原院をだまし取られてしまった理由を、源融の霊が質問している。
- イ 源融の霊が場所柄もわきまえず正装している理由を、宇多院が質問している。
- ウ 河原院に留まらせてもらえない理由を、源融の霊が質問している。
- エ 源融の霊が先祖であると主張する理由を、宇多院が質問している。
- オ 源融の霊が宇多院の住む河原院に出現した理由を、宇多院が質問している。

問五 傍線部4「所せく思ひ候ふなり」とは「居場所がなく感じています」という意味であるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子孫である醍醐天皇をはじめ多くの客がやってくるから。
- イ 宇多院が多く、屈強な家人を引き連れて引越してきたから。
- ウ 河原院で先代の天皇である宇多院と同居しているのが恐れ多いから。
- エ 情け容赦のない宇多院に西の対に追いやられてしまったから。
- オ 没落した子孫に河原院を捨て値で売り払われてしまったから。

問六 傍線部5「ただ人には似させ給はざりけり」と人びとが宇多院を称賛したのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 幽霊に対しても、威儀を正して敬意を表したから。
- イ 幽霊を怖れることなく、大きな声で霊の正体を言い当てたから。
- ウ 幽霊に出会っても、堂々とした態度で道理を説いたから。
- エ 幽霊の主張に耳を傾け、もつともであると素直に認めたから。
- オ 幽霊をうまくだまして、子孫に報いると約束したから。

受験番号					

氏名	

得点

一

--	--

問一

a

b

--

c

--

d

--

e

--

問二

--

問三

--

問四

--

二

--	--	--	--

問一

問二

a

b

--

c

--

問六

--

問七

--

		もし知識が「客観的な事実」であるなら、

三

--	--	--	--	--	--	--	--

問一

	「嫁」が、

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

問一

(2)

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

三

--	--	--

問一

--

問二

1

2

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--